

おり、それ程単純な関係ではないはずである。今後の歌舞伎はこの様式と写実の関係を、あらためて考えていく必要があると私は思う。

(第四回卒業生)

「曙光詩社」の山崎泰雄

——現代詩人素描(四)——

乙 骨 明 夫

曙光詩社は詩人川路柳虹が主宰した詩社である。山崎泰雄はその詩社に育った。同じ詩社から生まれた詩人平戸廉吉ほどには知られていない詩人であるが、泰雄には独自の詩風があった。

曙光詩社は、曙光詩社詩集として「伴奏」第一輯が一九一六年一月に発行されたときに成立したのであろう。この詩集の「余録」にはつぎのようにしるされている。署名はないが、編輯兼発行者である川路柳虹が書いたものであることはたしかである。

自分の製作欲と、あまりな詩界の寂寥紛乱を慨する念と、作物発表の機関を欲する心と、詩家に摯実な研究的態度の尠ない事や新進の人々の道の拓かれてないのを残念に思ふ心などが一緒になつて自分に何事かなすべく運命づけられた使命を感じ出してきた。曙光詩社の設立も「伴奏」の発行も皆これらの欲念

の発現に外ならない。自分は出来るだけの努力をこのために費したい。そしてこれが幾分でも詩界の成育に資するやうになれば自分の希望は成就されるのである。

「伴奏」の出る半年前の六月には、室生犀星萩原朔太郎による雑誌「感情」が創刊されており、その年の十二月には、日夏耿之介ほかによる雑誌「詩人」が出されるといふ風で、一九一六年は詩壇が急に活気をおびてくる年となつた。

山崎泰雄は一八九九年生まれ、「伴奏」第二輯(一九一七・一)に「夜に入る都」を、「伴奏」第三輯(一九一七・四)に「聖夜」を発表している。いずれも平凡な浪漫的叙情詩であるが、これは泰雄が詩壇にしろした第一歩である。

「伴奏」は第五輯(一九一七・一一)で終わる。そして曙光詩社

はあらたに月刊雑誌「現代詩歌」を一九一八年二月に創刊する。一九一七年一月に詩話会が、「感情」「伴奏」「詩人」を中心に発足した直後のことである。小説に圧倒されていた詩の勢力がようやく回復し、自由詩が順調にのび、とくに、庶民詩、民衆詩といわれるたぐいの、平明な詩が盛んになりつつある時代であった。

「現代詩歌」を第一巻第五号（一九一八・六）まで見ると、「伴奏」でも活躍していた平戸廉吉・前田春声・沢ゆき子らにくらべて泰雄がいくぶん低く処遇されているように思われるが、着実に毎号に詩を発表している。そしてまず、つぎの「夜の幻想」（現代詩歌一九一八・五）に独得の詩趣を盛った。A、Bの二部から成るが、Aの前半を引こう。

夜は厚身の天鵝絨の真白い胸を寄せて、

地を抱き、静かな Lullabye に埋めるとき、

青白い果の匂と、若草の息づくほめきと、

湧きめぐるなかに

なにかしい軟風は生れ出る。

私を繞ってさざめき入交ふ軟風よ、彼等は愛らしい踊り子たち、

纏れ舞ふその羅の Delicacy を私が見てみると、更に軽く、

更に速くそして眼をまどはす。その時

Chorus Grls が最高音を銀粉のように乱した。そして実に私

は一瞥した。無数の黄金の針が一どきに閃めき走ったのを。

何といふ麗はしい楽園の大地、魔のような芳香と毒々しい程の

楽音と——その高潮に

大きくかに絶えず波うつてゐる地よ、蒼空は頭上に静かにきらめく。

あゝ、いま、自らを失ふまでに軟風は舞ひ狂ひ、紅を飛ばして、陽炎のように乱れ、戯れ、崩れ入れば、

遠国の Twilight のかの宮殿と、その花園と、

忘れられた噴水と、大理石の裸像と、

すべては怪しげな奥深い光に燃え出す。

そして榻みあひ、ひるがへる軟風の Excitement

その酔ひ痴れた舞踊の眼まぐるしさに、

風景は仄かな耀きを強めてくる。

痛ましい恍惚と昂奮と願望と懊惱と——

焼けつくように私が立ちつくし、微かに呻いたとき、

私は地を匍ふ慕はしい Symphony を聞いた。

黄金と白銀との織り交ざる陰影の深んでゆく中に

儂ない風景はほろほろと光つてゐた。

題名の示すとおり幻想的な詩で、ドイツ後期ローマン派の詩人小説家アイヘンドルフの小説「大理石像」を思わせる作である。日本

の口語自由詩でこの種の作をさがすと、川路柳虹の「夜」（女子文壇一九一〇・四）あたりにつきあたるであろう。柳虹の「夜」は

夜

夜よ

汝の黙った瞳から、

魅^まられるやうな恐怖^{おそ}が突^つき立つ。

で始まる、世紀末からようやくのがれようとするロマンチズムの作であるが（私の「川路柳虹論」（国語と国文学、一九七二・五）にこの詩についてややくわしく書かれている）泰雄の「夜の幻想」はまったくデカダンスから離れた境地のロマンチズムをにおわせている。ロマンチズムは当時の詩壇で別にめづらしくはないが、たとえば福田正夫の詩などと比較してみると、泰雄の詩には感傷性がすくないということは言えると思われる。それは、泰雄がかなり知的に自己および自己をとりまく世界を客観視していることに由来するのであろう。「夜の幻想」の場合には、作者は徹底的に浪漫的物語の世界にはいりこんでしまっている。現実世界で詠嘆することにもなう感傷性が、すくなくなっている。

「夜の幻想」は泰雄の幻想的詩の実例であるが、泰雄の詩には、知的な面をはっきりとのぞかせた作もある。「活動写真」（『現代詩歌』一九一八・九）では

「涙は滝とまがへども、かよわき少女のわれがなとてほどこす
すべのあらうものか……。」

ローラは涙を押しぬぐひ、しほしほと賑はひをあとに門を出
る。

室内^{うち}では人中を泳ぎ歩き、客に笑顔^{えんご}をまきちらす、憎い小才子
ヘンリーが忙しそうに何をす。

フィルムはまはる、絵がちらちらと夜は刻む、

よひはてた人々の胸に、

悲劇は爽かな味を匂はせて煙のように漂ひ去る。

と書いている。映画のおもしろさに没入した自己を描いているのではなく、映画館の風景をゆっくりと観察して書いているという風である。また「月の下に」（『現代詩歌』一九一八・一〇）という詩がある。

高台にある私の窓をあけて

眼の下に連なる貧しい屋根を見る。

ではじまる詩であるが、貧しい町や人々を客観的に叙述するのではなく、庶民的詠嘆をするのではない。

露路では意根の人殺声出す間もなくやられて了ふ。

角の店には覆面の強盗が入りおやじが背ざめてへたばった、
長家の爺は一人もの、世をはかなんで首をくぐるし

暗い原では不良少年がナイフを揮つ大喧嘩。

犬がぎゃんぎゃん吠えてゐる。按摩がころんだ。酔払ひがどぶ
におちる。

そうだそうだ、面白い芝居だ。みんなしっかりやれ。

外には月が静かに微笑して

町の上からでらしてゐるぞ。

と泰雄は書くのである。こういう風刺的な表現は、民衆派の詩には見られない。

一九一八年の後半で、山崎泰雄は「現代詩歌」の誌上で、詩以外の文章も書き、曙光詩社の主要同人になっていたように思われる。

「ルミ・ド・グウルモン評伝」(一九一八・八)と題する評論、「前号の詩評」(一九一八・一一)という批評、「はるはよみがへる」を讀んで」(一九一八・一二)という感想、などを書いている。

一九一九年にもひきつづき、泰雄は「現代詩歌」に書いている。

「夜の女」(一九一九・一)という詩がある。

夜。香やかな夜。空が蒼めてふるへ、

山茶花が黙って散る夜は、私はぢっとその嘆息を聞かうとして佇んでゐる。

夜の女はかういう時きっと私の傍に、蛾のように妖しく立つのだ。

それは私に面羞い。私は胸のときめきに堪えかねる。私はよろめきかける。

すると女の姿は燃え立ち

「夜の青年よ。」彼女は粘りつく手で、
ひしと私を抱きしめるのだ。

夜だ。湧き乱れる感情の夜だ。けれども、

私は面羞い。胸が騒ぐ。よろめくまでに悩ましい。

という風に詩は続いてゆく。この詩は全く、蒲原有明の傑作「茉莉花」に類似している。ただ、かれが文語詩であるのに対して、これは口語詩である。そして、有明の詩が気分象徴詩として夢幻のふんい気をたたえているのに対して、泰雄の詩の表現はきわめて直接的である。それだけに、泰雄の詩は陰影にとほしく、知的である。

一九一九年にはひきつづき「現代詩歌」に詩を発表しているが、その中で「死神」(一九一九・一二)が「夜の幻想」と同趣の、浪漫的物語風で、個性を發揮している。しかしながら、一九一九年後半では詩の数がすくなくなり、一九二〇年にはいると、「現代詩歌」に詩を発表することがほとんどなくなってくる。「ポール・クロードル」(一九二〇・六)のような評論は見られるのであるが、ただ、この年に出た詩話会編「日本詩集一九二〇版」(一九二〇・七)には「寂しい月」「夕べの風」の二編が掲載されているから山崎泰雄もようやく新進詩人としてみとめられて来たと言ふことができよう。その詩にはまだ安定したところがなくて、種類の詩風を併有しているが、前述したような浪漫的物語風にもっとも大きな特色を發揮していたと言えようか。

最初に述べたように、曙光詩社には異才平戸廉吉がいた。廉吉は一八九三年生まれ、泰雄より六歳ほど年長である。廉吉はすでに詩話会編「日本詩集一九一九版」に参加していて、この点でも泰雄の先輩であるが、一九二〇年あたりでは、まだ廉吉の真価は發揮されていない。したがって、一九二〇年あたりまでの曙光詩社では、平戸廉吉、山崎泰雄、沢ゆき子、あたりが目だった存在として並んでいたように思われる。ただ、廉吉やゆき子の詩は「文章世界」にもせられていたのに、泰雄の詩は「現代詩歌」に限られていたようである。

一九二一年にはいるとふたたび、泰雄の詩が「現代詩歌」にのせられるようになる。一月、二月、三月、五月、とひきつづき詩が發

表されているが、この年の作には迫力が乏しい。そして、「日本詩集一九二二版」(一九二二・六)に作品をのせたあと、一九二二年の七月で「現代詩歌」が終刊となり、同年九月に、曙光詩社からあらたに「炬火」が発刊されてから、泰雄は詩を発表しなくなる。

「炬火」は一九二三年一月で第一次の発行を終えるが、第一次「炬火」に泰雄が発表したのは、評論「アルペール・サマン論」などの散文だけである。ただ、この間に、泰雄は「日本詩人」の一九二二年一月号と一九二二年三月号とに詩を発表していて、「日本詩集一九二二版」(一九二二・三)にも詩をのせているが、平戸廉吉が「第四側面の詩」(「炬火」一九二二・一〇)、「小さい詩六つ」(「日本詩人」一九二二・一一)を書き、一九二二年一月に東京日比谷の街頭で「日本未來派宣言運動」のリーフレットをまいたのに比べると、全くじみな活動をしていただけになる。以後は詩作が少く、「日本詩集一九二三版」(一九二三・五)「日本詩集一九二四版」(一九二四・五)にわずかにその名を見ただけにとどまったが、「日本詩人」の一九二四年一〇月号に「追転唱(交想詩篇・第一)」と題する異風の詩を発表した。この詩は、はじめに「I緩徐に重厚に」「II歌謡風なる」「III諧謔調」「IV快速に旺盛に」としてのされているところから見て、交響曲風に作られたものであろう。そしてまず「I秋夜嘆」のアンダンテが、秋の夜に「葬ひの記憶に憑かれた自分」「固い椅子に残る私」をうたい出す。つづいて「II夕景」のカータービレは、文語で夕景の「はかなく咲きし眺め」をうたい、「III賭をしやうか」のスケルツォは、「俺」と「お前」(じつは自己

の分身か)との対決で

お前が、いゝか、下らなく涙を流さないやうにするか、

僕が美事にある氾濫を乗切るか、
俺も武士の端くれだ。負けやしないぞ、
え、千両箱と花だらけの情婦で賭とゆかう！

と意気のあるところを見せる。そして「IV伉儷頌歌(古風なる)」のアレグロ・ビバーチェは

この日を讃へよ！ 風は現はれ、緑に濡れた野を走る。

陽は拡がる。処女よ、眺めを胸に映せ。

で始まり、明るく力強く展開し、

私は狩し、私は歌ふ。この白昼の下で。

私の脊に輝く太陽、私の刻々を抱く季節、躍る影、また光！

ああ、この日を讃へよ。春四月、緑の野は空に映り、

陽は漂ふ。油のやうに澄んだ四月、謾のやうに膨んだ四月、

漲った四月。その只中に小さく点じて

この日の胸飾り、そのリボンのやうにさわさわする我らである。

で終曲となる。この詩は、音楽と詩との融和をめざしたかに思われる点に野心が見られたが、散発に終わった。この作品を発表して以降は一九二五年にはいっても、新作は見られず、「日本詩集一九二五版」(一九二五・四)には、前述の「秋夜嘆」と「賭をしやうか」の二編がのせられただけであった。

泰雄の処女詩集「郊外風詩篇」は一九二五年一月に文武堂書店

から刊行された。一九一八年から一九二五年にいたるまでに作られた詩を四部に分けて三十八編収めている。著者の書いた短い序はかつては多少の昂奮をもって夢みもした私の第一詩集を今そつと出すことにした。むかしわが愛着なる詩篇が多くこの中にあらる。

と書き始められている。また、この詩集のあとがきとして川路柳虹は「詩集のうしろにそへる言葉」を書いた。それは、

私たちが曙光詩社を結んで四季刊行の小詩選「伴奏」を出したのは十年の昔となった。その一番最初の盟に加はってくれた詩友の中でいまま詩をかいてゐる人はほとんど数へるほどしかない。まして詩壇に名をとどめてゐる人は沢ゆき子夫人とこの山崎泰雄君ばかりであらう。

ではじまる。柳虹は以下、泰雄が一中、一高、大学と、とんとん調子に進学していったこと、「伴奏」の思い出、若くして没した平戸廉吉への哀悼の心、などをしるしたあと、

山崎君がいまはじめて処女詩集を出すといふことは売名欲旺盛な現代青年詩人の濫発にかゝる詩集横行の間にあって何といふ奇観であらう。君はもう五年も六年も前にすでに一冊ぐらゐ出してゐてよい人だ。処女詩集とするにはあまりオールドミスを感じがなくもない。だがこゝに盛られた詩のまた何といふ生生活とした水々しさと若さをもつてゐるだらう。(中略)だがかういふ功利観念が詩人の間にはびこることはまた余りにも悲しいことだ。黙つてゐるものゝ力を見せよう。永い間に向つて真個

の「詩」の勝利を思はう。私たちの詩友は幸にしてこの良心があつた。私は山崎君の詩の美しさよりこの良心の美しさに実は惚ればれるものなのだ。さあ乾盃しよう。

と結んだ。

泰雄は「日本詩人」(一九二六・一)に詩二編を発表し、「日本詩集一九二六版」(一九二六・五)に二編の詩をのせたが、詩作は依然として乏しく、曙光詩社の「炬火」が一九二六年に改刊発行されてからも、これに評論をのせるだけであつた。一九二六年十月に詩話会が解散されてから後も詩人としての仕事はもちろん続けられ、一九二九年三月に雑誌「旗魚」を村野四郎らと創刊したが、ここではそれにふれないことにする。一九二〇年代までの泰雄についてしるすにとどめておこう。

(本学教授)